

自立的に学ぶ過程や成果が認められる経験から 自信と主体的な姿勢が育つ

最近、「自分に自信が持てない」「夢や希望を抱きにくい社会になってきた」という声が聞かれるが、子どもを取り巻く環境や子ども意識にはどのような変化があるのだろうか。そして、子どもの実態を踏まえて自己肯定感を育んでいくためには、授業においてどのような指導が必要なのか。上智大の澤田稔准教授と、同准教授と共に自由度の高い授業のあり方について研究を進める2校の校長に話を聞いた。

●子どもたちの自己肯定感について

価値観の多様化により

自信を持ちにくい社会に

——先生方が普段、子どもたちとかわる中で、自己肯定感が低下していると思われるのでしょうか。

倉島 私が子どもと接している限りでは、以前に比べて自己肯定感が特に低下したとは感じていません。卒業式を控えた時期には、6年生を数人ずつに分けて、給食会を毎日開きました。そこで夢は何かと尋ねると、ほとんどの子どもがなりたい職業を挙げられます。6年生なりに自分を肯定的に捉え、将来のイメージを抱けているのだと感じます。

それでも、諸外国と比べた調査などの結果で日本の子どもの自己肯定感が低いのは、自分を強く押し出すことを避ける国民性が影響しているのではないのでしょうか。

中川 私も同感です。子どもの自己肯定感が上がったとも下がったとも言えないと思います。確かに、今の子どもは将来なりたい職業を具体的に言いますが、それは、学校が4年生で「2分の1成人式」を行ったり、職場体験をしたり、教師や保護者から「夢を持ちなさい」と言われたりして、将来のことを聞かれる機会が増えたために、「答えなければいけないんだ。とりあえずこれにしておこう」と、答えを用意している印象も受けます。もちろん、キャリア教育などを行うことで、本

上智大総合人間科学部

澤田稔 准教授

さわだ・みのる ◎名古屋大学院国際開発研究科博士後期課程単位取得後退学。名古屋女子大文学部准教授などを経て、現職。専門はカリキュラム・教育方法論、比較教育学（アメリカにおける学校教育）。



授業で高める自己肯定感

東京都板橋区立大谷口小学校

倉島民雄 校長

くらしま・たまひ◎東京都の公立小学校教諭、東京学芸大学附属小金井小学校教諭、板橋区立板橋第六小学校校長などを経て、現職。

板橋区立大谷口小学校◎2011年度から2年間、板橋区指導力向上特別研究指定校となり、「個に応じた指導法の工夫と学習環境の活用」の研究に取り組み。児童数は376人。



気で関心を持つ場合もあるので、将来について考える機会が増えることは否定しませんが、自分の存在をしっかりと見つめた先に夢があるという感じではありません。

自己肯定感は、自分の存在価値を認められることが本質だと思います。注意したいのは、自己表現が出来る子どもが必ずしも自己肯定感が高いとは限らないことです。自分をあまり表現しない子どもでも、友だちの話を真剣に聞いたり、文章で考えを述べたりする態度から、自己肯定感が育っていると感ぜられることは多々あります。

澤田 子どもの自己肯定感が以前と比べて変化したかどうかは、一概には言い切れないかもしれません。明らかに、諸外国と同じ

指標を用いて調査をすると、日本における若者の自己肯定感が有意に低いことです（P. 6 図1）。

昔と違い、確かに現代社会は、自己肯定感を持ちにくい環境にあると言えるかもしれません。職業や生き方など、生活のあらゆる面で選択肢が増え、自由に選べるようになった一方で、「それでいいよ」と自分の判断を認めてくれる人や、自分の判断を信じる上での拠り所が見付かりにくくなっていくからではないでしょうか。自分ではどれを選べばいいのか分からず、他の人も皆、正解が分からないので、教えてくれることが人によってまちまちなれば、自分の判断や選択に自信が持てないとしても不思議ではありません。しかも、「自分で選んだ結果は自分の責任」と言われる厳しさがありません。ですから、現代人が自己肯定感を持ちにくいというのであれば、それは子どもだけでなく、大人も同じだといえるでしょう。

しかし、これらの状況は、他の先進国にも見られると思われれます。にもかかわらず、日本の若者の自己肯定感が有意に低いというデータがあるのは、教育や子育ての場において、子どもが自由を与えられた上で、自分で考え、選択・判断し、失敗を通じた学びを積

み重ねていく試行錯誤の経験が、十分に支援

されていないからではないでしょうか。正解を先取りしようとし、「空気」を読んで周りに合わせようとする傾向が高まる高学年になればなるほど、自己肯定感が低くなっているという点は示唆的です（P. 6 図2）。

とはいえ、教育現場で子どもの自己肯定感が課題になることは、それだけ一人ひとりの子どもを尊重すべきという風潮の高まりと捉えることも出来ます。悲観することなく、この社会状況に比べ得る教育実践にチャレンジしていきましょう。



東京都板橋区立板橋第一小学校
中川久亨 校長

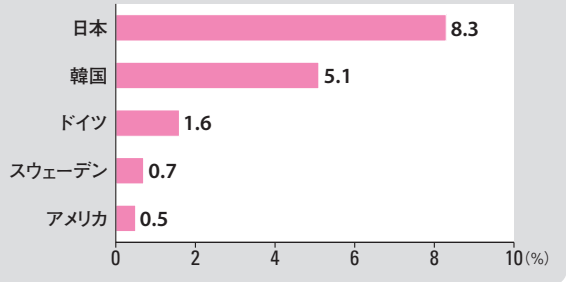
なががわ・ひさみち◎東京都の公立小学校教諭、葛飾区教育委員会指導主事、台東区教育委員会指導統括指導主事などを経て、現職。

板橋区立板橋第一小学校◎板橋区指導力向上特別研究指定校。「二人一人の子どもが生き生きと学ぶ姿が見える授業づくり」学習環境を生かして」をテーマに研究に取り組み。児童数は357人。

*プロフィールは2013年3月時点のものです

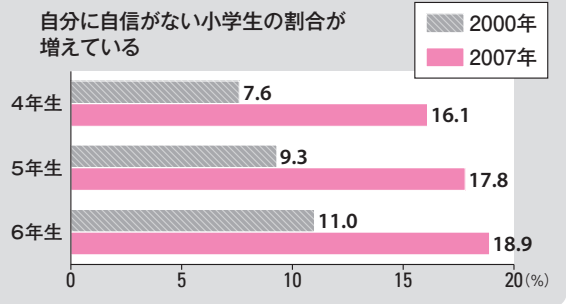
図1 青年の自尊感情 諸外国との比較

自分自身について「誇れるものはない」と答えた人の割合は日本の若者に多い



*「あなたは自分自身について誇れるものを持っていますか」という質問に対して、「誇れるものはない」と答えた各国の若者の割合
*内閣府「第7回世界青年意識調査」(2004)を基に作成。調査対象は18~24歳で、日本は1,042人。調査方法は、質問紙を用いた個別面接調査

図2 子どもの自尊感情 経年比較



*「自分に自信がありますか」という質問に対して「あてはまらない」と答えた人の割合
*総務庁「低年齢少年の価値観等に関する調査」(2000)、内閣府「低年齢少年の生活と意識に関する調査」(2007)を基に作成。調査対象は、9~14歳の男女。2000年は1,075人、2007年は1,105人。調査方法は、調査員による個別面接聴取法

● 授業で自己肯定感を育むには①
自由と責任を与え
全面的に承認する

——自己肯定感を育むために授業ではどのような工夫が考えられるでしょうか。

倉島 自己肯定感を育む上では、「自分がやった」という成果を、誰かに認められる状況をつくるのが何より大切だと考えます。自分で選んだり決めたりしたことが他者に認められることで、大きな達成感が得られるのです。ところが、日本の学校教育は、一斉授業が中心で、子ども自らがやりたいと思って取り組む学習が少ないのが現状です。「やらされている」と感じる学習が多く、「自分がやった」

という実感はなかなか得られません。

中川 日本で行われている一斉指導は素晴らしく、世界に誇れるものですが、授業に子どもが自ら考える場面をもっと増やした方がよいと、私も思います。例えば、本校では、授業の最後にその時間に学んだり考えたりした内容を自分で語れる子どもを育てることを目指しています。その具現化のために、一部の授業で、自分が考えないと学びが進まないという状況をつくり、子どもが主体的に動くことを促すようにしています(板橋区立板橋第一小学校の事例はP.10からを参照)。

倉島 本校では、「こう学ばせたい」という教師の論理が子どもの論理に先行して授業を行ってしまうという課題がありました。そこ

で、教師が複数のコースを準備し、子どもが興味・関心や能力、学習スタイルなどを考えてコースを選択し、自分の力で学習を進める授業を一部で取り入れています。そうした学習では、子どもの実態に合った課題を設定することが大切です。易しすぎても難しすぎても、「自分が頑張ったから出来た」という達成感は得られません。子どもの学びの履歴にも配慮しながら、課題を設定しています。

澤田 2人の話のように、自己肯定感を高めるには、子どもに大幅な自由度が与えられた学習機会を提供することがとても重要です。

日本では、一人ひとりがばらばらなのは良くない、「個」は孤立の「孤」になってしまうのではないかと捉えられています。一方、欧米では、「孤独」は自立のきっかけになるために必要だという考えがあります。1人になることがあるからこそ、集団になった時に豊かさが生み出されるという発想です。

日本でも、個を大事にした授業が、今以上に求められると考えます。私は、全ての授業でなくても、一部の授業で次のようなスタイルを取り入れてみることを提案しています。

単元の導入とまとめ以外は、一斉授業でなく、個々の子どもが用意された教材を用いて自立的に学習に取り組むという進め方です。ルールとして「人に迷惑を掛けない」「教材や道具を粗末に扱わない」「自主的に進める」の3つを設けますが、あとは子どもに任せま

授業で高める自己肯定感

図3 「試行錯誤」による「尊厳」と「承認」のメカニズム

著作権の関係で表示することができません。

す。ルールさえ守っていれば、たとえさぼっていてもすぐには注意しません。「このままで終わってはいけない」と子どもが自ら気づき、学習に取り組み始めるのを待つのです。

教師の指示に従ったことを褒めるだけでは、その子どもの尊厳につながるような承認には至りません。自分の試行錯誤の経験やそこから得た成果が肯定的に評価されてこそ、「自分は自分のままで、そこそこいい」という自己肯定感が高まるのではないのでしょうか。これは、言うことを聞いたら褒めるという「条件付き承認」よりも、子どもがその子どものままで、自分なりに考え、判断して表現することを支援し、その成果を認める「全

面的承認」に近いといえます(図3)。

子どもに授業を任せては、目標とする学力が付かないのではないかと疑問を持たれるかもしれません。だからこそ、そうならないように、学習材や学習環境を、丁寧に工夫を凝らして作成することを心掛けます。子どもは信じて任されると、それなりの責任を果たそうとして動き出します。それを承認することが、子どもの自信につながると考えます。

こうした個人が進める自立型学習では、協同性が育たないのではないかと言われることもありますが、そこでも、子どもたちの間に「自発的な協同性」が生じ、多様な学び合いが見られます。

中川 確かに、自由度の高い授業をすると、子どもは「自由には責任が伴う」ことを実感を持って経験できます。自由というと楽しいイメージがありますが、自分で決めて自分で動くというのは、受け身でいることよりもずっと大変なものです。任された以上はやらなくてはならないという意識が、自由を与えられることによって生まれているように思います。

● 授業で自己肯定感を育むには②
子どもに学びを任せる授業で達成感を持たせる

先生方のお話に出てきた自由度の高い授業は、日本ではあまり見られない授業スタイル

ルですが、成果を具体的に教えてください。

澤田 私が学校に提案する時も、大半の先生方はその手法に懐疑的ですので、まずは「だまされたと思って一度やってみてください」と、とにかく実践してもらおうようにしています。すると、いつも受け身で授業を受けている子どもが、自分から動いて学習する様子があちこちで見られ、その姿に教師は驚き、感動します。そして、この授業スタイルに可能性を見いだし、校内に広まっていくことがよくあります。先生方が統制しようとしすぎると子どもは離れようとはしますが、逆に自由を与えると、自分で動くための方法を教師に積極的に聞きに来るようになるのです。

倉島 本校では2年間にわたって自由度の高い授業を実践してきましたが、1年程経った頃に子どもになじんできたという印象です。今では、自分に学びが任される授業に、子どもは楽しそうに生き生きと取り組んでいます。子どもがこうした授業を楽しんでいるのは、「自分でやった!」という達成感が得られることが大きいからでしょう。本校ではあくまで一部に自由度の高い授業を取り入れており、他の大半は一斉授業ですが、ここで培われた「自ら学ぶ」姿勢は、一斉授業での学習姿勢にも表れていると感じています。

澤田 同じ課題を同じペースで取り組む授業では、どうしても子どもの間で序列が生まれず、一人ひとりの良さを引き出す上で

あまりよい影響はありません。しかし、子どもが自分で計画して学んでいく授業では、異なる人間関係が築かれることが多々あります。例えば、子どもは個々に異なる課題に取り組むため、進度もまちまちです。普段は進度の遅い子どもでも、既に取り組んだ課題であれば、まだ取り組んでいない誰かに教えることが出来ます。一斉授業では目立たない子どもが活躍できることも、この授業スタイルの良さといえるでしょう。

●授業で自己肯定感を育むには③

高学年は自己肯定感が低下 認め合いを重視した授業を

中川 子どもが自由に進める授業では、子どもが自ら計画を立てる必要があります。1、2年生では単元全体を見通すことがまだ難しいので、3年生くらいから取り入れるのがよいのかもしれませんが、ただ、1、2年生でも、課題やコース設定を工夫することで、自分で選択させたり決めさせたりすることは可能だと思います。

澤田 発達段階という言葉に縛られすぎると、子どもの可能性を狭めてしまう危惧もあると思います。

幼児教育には、自由保育という考え方があります。一斉保育とは対照的に、子どもに自分でどのような遊びをするのか、1人で遊ぶのか、誰かと遊ぶのかということを考えさせ

るという保育活動です。幼児期に子どもが自分で課題を見付けて解決するという活動が出来ているのですから、低学年でも、自分たちが進める学習がある程度は見通すことが出来るのではないかと思います。

また、子どもが自由に進める授業では、早く進むことよりもよく分かることが大事だということ、そして、私の尊敬する先生の言葉を借りれば「分かったふりをする事、人の学習ぶりをばかにすること、自分の心にズルすることが一番恥ずかしい」というメッセージを、さまざまな場面で、いろいろな方法で子どもたちに送り続け、子ども同士が互いを認め合う環境を整えることが大切です。高学年になると、表面的な褒め言葉を掛けられても、「承認」されたとは思えません。教師は、一人ひとりの学びの姿をよく捉えて、的を射た褒め方が出来るように研鑽を積む必要があるでしょう。

●保護者との連携

子どもの成長や変化を 直接見られる機会を設ける

——自己肯定感を育むためには、家庭との連携が不可欠と思われれます。家庭への働き掛けなどで工夫されていることはありますか。

倉島 保護者に、教室で子どもが学ぶ姿を見てもらうようにしています。学級通信など言葉で伝えることも大事ですが、授業参観で子

どもが変わっていく姿を実際に見てもらおう方が、保護者は子どもの成長を実感できるでしょう。そうすれば、家庭でも子どもを認めるような声掛けが多くなり、自己肯定感の向上につながると思います。

中川 子どもを認めることが、自己肯定感を育むためには何より重要です。そのためにも、担任には1日も早く学級全員の名前を覚えるように言っています。あいさつも「〇〇さん、おはようございます」と名前を呼んですると、子どもは「先生の頭の中に自分という存在が入っている」とうれしく感じます。

同様に、保護者には子どもを認めることを大切にしてほしいと強調しています。先日、保護者も参加して行った3年生の調理実習で、教師が包丁の使い方を教えているにもかかわらず、子どもがためらっていたら、保護者が包丁を手に取り、切ってしまう姿が見られました。これでは、自分で取り組もうとする力が育たず、何でも他人任せになってしまうと思います。最初から答えを与えるのではなく、まずは子どもがやるうとして認めることが大切です。安全にかかわること以外は、「失敗してもいいからやらせる」という気持ちを持っていただきたいです。

澤田 保護者もまた自己肯定感を持ちにくいのが現代社会です。ありきたりですが、保護者と教師が「共に」子どもの成長のために出来ることを考えて、実行しようという姿勢を

授業で高める自己肯定感



共有することが大切でしょう。

保護者に自信を持ってもらう上で有効なのが、子どもの育ちを共に確認できる機会を持つことです。例えば、アメリカなどで行われている子ども主導の三者面談はお勧めです。これは、子どもがその学期での自分のベスト・ワークや苦労したこと、次の学期への課題などについて自分で説明し、保護者や教師からの質問やコメントに受け答えしながら進めていくという方法です。面談前には、子ども同

士で保護者役、教師役になってリハーサルをします。保護者は、子どもが自分の言葉で、自分の学びの履歴をたどる姿を目の当たりにすると、子どもの成長を実感し、子育てに自信を持てるきっかけになるように思います。

● 学校全体で取り組むために

子どもの変化を教師間で共有することが意識の高まりにつながる

——自己肯定感を育む授業を校内に広めるために、どのようなことがポイントとなるでしょうか。

中川 教師間で子どもの良さを共有し、また指導の苦労を共にすることが大事ではないでしょうか。そうするうちに、共通理解が深まっていき、協働する意識が生まれるでしょう。

倉島 本校では、研究の成果を共有することが、学校全体で取り組みを進める上で欠かせませんでした。具体的に言うと、「子どもが変わった」という実感が、研究を推進する原動力となっています。学校には大勢の教師がいて、皆が同じような意識とは限りませんが、多少の温度差があるものです。私は、意欲のある教師を核として研究を盛り上げていく雰囲気をつくることも大切にしています。

中川 子どもの変化は、教師に大きな影響を与えます。本校でも、子どもの姿をきっかけに授業改善の努力を続けていたら、教師一人ひとりの指導力と同時に、組織力が高まって

きました。共通理解を図るスピードがとても速くなったと思います。

——最後に、これから取り組みを進める上でアドバイスをいただけますか。

澤田 ここでは3つを挙げたいと思います。

1つめは、授業研究で話題の中心を子どもに置くことです。授業研究では、教師の発問や板書の仕方に力点を置くことが多いかと思いますが、そうではなく、子どもの名前を挙げて「○○さんは、あの時にこのような考え方をしていたから、あのようになつぶやきをしたのではないか。そうならば、このような支援も考えられたのではないか」といった、子どもの具体的な姿や声を通した、授業の振り返りを教師全員で行うのです。

2つめは、授業を今以上にもしっかりと子どもを主役にしたものにするということです。周到に準備して子どもに任せると、教師側が予想した以上に、子どもが自ら学んでいく姿に驚き、考えを改めることが多く見られます。

3つめは、出来るだけ学校全体のチームワークが育つような授業研究にすることです。互いの個性を生かし合いながら、学校全体を1つのチームとして授業改革の試行錯誤に取り組み、子どもが成長する姿にチームとして手応えを感じられる時、教師自身の自己肯定感も育まれていくと思うからです。

——本日はありがとうございました。